

大槻 俊斎 — 多くの人に新しい医療を —

大槻俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）で生まれました。先祖は移住してきた開拓者で、赤井村の荒れた土地を開拓し、豊かな田畑にした人たちでした。大槻家の次男であった俊斎は、いつも父から先祖が未開の土地を開拓したように自分の運命を自分で切り開いていかなければならないと言い聞かされていました。

そこで、俊斎は人の役に立つことをしたいと思い、医者になり病氣やけがで苦しむ人々を救いたいと考えるようになりました。十七歳のころには、熱心に医学の本を読むようになり、江戸（現在の東京）に出て勉強したいという思いを強めました。

俊斎が十八歳になったとき、兄の援助のおかげで父の許しを得て、江戸に出ることになりました。江戸では、名医と評判の高かった手塚良仙のもとで修業することになりました。そのとき、石巻出身の湊長安や岩手県水沢市出身の高野長英らと出会いました。俊斎は、同郷の仲間と多くのことを学ぶ中で、将来のことを語り合いました。特にこれからの医学では、西洋の学問である蘭学を学ぶ必要があるという思いを強くもつようになりました。

俊斎は三十四歳のとき、手塚良仙の援助により、蘭学を学ぶために長崎に留学しました。このときも数多くの仲間と出会い、お互いにはげましたり自分を高めたりしながら新しい医学を学び続けました。



赤井に建つ俊斎の生誕の碑

蘭学：
江戸時代にオランダ語によって西洋の学術や医学などを研究しようとした学問。

三年後に江戸にもどってきた俊斎は努力を重ね、外科を専門とする町医者として開業することができました。医者になりたいと思いい立ち、二十年間学び続けてやっと達成できたのでした。俊斎は、いつも町の人のことを考えた治療を行いました。しかも、診察の技術も大変すぐれていたので、たちまち江戸中の評判になりました。

このころ、江戸では毎年のように天然痘が流行していました。天然痘にかかってしまうと、高熱とともに体中にふきでものが出て、命を落としてしまうのです。運良く命が助かったとしても、顔などにひどいあとを残してしまうのでした。この病気の治療法は、江戸では行われていなかったため、人々はどうすることもできませんでした。

すでに、外国では予防するための種痘という方法が発見されていました。日本では、九州で初めてこの治療法が行われました。その後、長崎で俊斎といっしょに蘭学を学んだ緒方洪庵によって、大阪でこの治療法が行われるようになり、多くの人の命が救われていたのでした。俊斎は、この治療法を知っていながら江戸の人を救えないもどかしさを感じていました。

当時の江戸幕府は、漢方医療を重視していたのです。そのためオランダ語を通じて伝わってきた蘭方医療は、外科と眼科しか許されていませんでした。何とかしたいという思いから、俊斎は、長崎で学んだ伊東玄朴を訪ねました。江戸の人を救いたい、江戸に種痘を行う施設を作りたいという思いを玄朴に伝えたところ、玄朴も同じ思いをもっており、二人は夜を徹して話し合いました。治療ができるようにするための手段、医者をめざしたお互いの思い……。気がつくどすっきり夜が明けていました。俊斎の迷いは消え、晴れ晴れとしていました。



天然痘：
ウイルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気にかかって亡くなる人が多かった。

種痘：
痘苗（ワクチン）を人の体に接種し、天然痘の感染を予防する方法。

さっそく、俊斎と玄朴は江戸中の蘭方医を訪ね歩き、二人の思いを伝えました。俊斎は、蘭方医の今後の役割と医療活動の重要性を熱く語りました。すると、あつという間に八十二名もの医者が賛成してくれました。だれもが俊斎と同じ気持ちをもっていたのでした。

そして、江戸に種痘所を作る計画を練り、幕府に許可を願いました。はじめのうちは漢方医らの圧力があつたなか思うようにはいきませんでした。しかし、俊斎や玄朴たちはあきらめませんでした。人命救助という立場から、何度も何度もうったえ続けたことによって、俊斎たちの熱意は幕府の役人の心を動かし、少しずつ理解されるようになりました。

五か月後にはついに幕府からの許可が下りました。念願がかなった俊斎らは、すぐに種痘所を建設するため資金集めをしました。ここでも、俊斎らの思いに共感した医者たちによって、たちまち多くの寄付金が集まり、江戸で最初の種痘所をお玉が池（現在の東京都神田）に作る事ができました。

「よかった。」

と、俊斎はつぶやきました。そして、江戸に出てきて以来、初めて熱い涙を流しました。

俊斎は、たくさんの仲間といっしょに「お玉が池種痘所」の看板を立てかけました。そのとき、俊斎はすでに五十五歳になっていました。

このころ、江戸では天然痘のほかにも、コレリ病が大流行していました。四人に一人の割合で、この病気がかかってしまうほどでした。この病気は、一瞬にして人の命をうばうため、江戸の人々は恐怖におびえ、さまざまな情報が乱れ飛んでいました。薬も祈祷も効き目がなかったため、どうしようもありませんでした。

俊斎は、江戸におけるコレリの流行のすさまじさを正確に幕府に報告しました。そして、西洋医学の知識を取り入れ、さらに自分なりに工夫を加えて、玄朴とともに治療に当たりました。

こんなとき、種痘所の近くで火事が発生して、またたく間に大火となり、種痘所も燃えてしまいました。焼け跡を前にした俊斎たちは、それでも病気で苦しんでいる人を救わなければならないと考え、自宅などをとり

コレリ病：
コレラ菌の感染により、おう吐やげりなどが続き、亡くなることもある病気。
祈祷：…
占いの師や霊能者、僧侶などをとおして、神や仏に祈ること。

あえずの種痘所にしました。

同時に、多くの仲間呼びかけ、すぐに新しい種痘所を作ることになりました。仲間の医者たちも協力してくれる人を必死に探していました。俊斎は、仲間の姿を見てますます力がわいてきました。これまでどおり治療できる日が近いことを確信しながら、病気で困っている人の治療に全力を注ぎました。

のちに、この種痘所は、「西洋医学所」と名前を改めました。俊斎は種痘所でも西洋医学所でも、その初代頭取になりました。俊斎は、人を押しつけてまで頭取になろうとする人ではありませんでした。しかし、これまでの俊斎の働きから、だれもが頭取には俊斎がいちばんふさわしいと思ったのでした。



東松島市保健センターに建つ
大槻俊斎像

大槻俊斎

大槻俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）に生まれた。長崎で蘭学を学び、天然痘を予防するため、「お玉が池種痘所（現在の東京大学医学部）」を設立し、「天下の名医」とまで呼ばれるようになった。蘭方医学を取り入れた大槻俊斎は、日本の医学界の発展に大きく貢献した。

頭取…
会社などの取締役
ここでは、西洋医
学所の首席。
（代表者）

内海 五郎兵衛 — 命と生活の架け橋をつくる —

今から百五十年ほど前、石巻を流れる北上川には、橋は一つもありませんでした。当時、石巻には、住吉や袋谷内（現在の水明町）など四か所に渡し場があり、渡し舟が村と村を結ぶ役目を果たしていました。人や物の往来は、大雨や洪水になると制限され、人々は不便な生活をせざるをえませんでした。

五郎兵衛は、天保十二（一八四二）年、牡鹿郡水沼村（現在の石巻市）で農業を営む片岡与七の長男として生まれました。五郎兵衛は小さいころから働き者で、心に決めたことは最後までやり通すねばり強い子どもでした。五郎兵衛は、病気の父親をもつ友達がいれば、近くの川で魚をとって売ったり夜遅くまでわらじ作りを手伝ったりして、困っている友達を助けることもありました。

五郎兵衛が二十四歳のとき、突然、父が重い病気にかかってしまいました。

そのころ、五郎兵衛が住む村には医者がいまいませんでしたので、このようなきは遠くの石巻村から医者と呼ばなければなりません。

「すぐに医者を呼んでくるから、待っていてくれ。父ちゃん。」

と言うなり、五郎兵衛は暴風雨の中、川沿いの渡し場に馬を走らせました。ようやく渡し場にたどり着いた五郎兵衛の目に映ったのは、数日前から降り続く雨のために、荒れ狂う北上川でした。何とか舟を出してもらいたい一心で、川沿いの渡し舟の船頭の家を訪ねてお願いしました。しかし、舟が出せるような状態ではありませんでした。



父のことが心配でならなかったのですが、しかたなく五郎兵衛は知り合いの家で一夜を明かし、川の流れがゆるやかになるのを待ちました。ところが次の日も、北上川の様子は変わっていませんでした。むしろ前日より水かさも勢いも増していてどうしようもない状態でした。五郎兵衛は、目と鼻の先にある石巻村がこんなにも遠いのかという思いと、何もできない自分に対する悔しさでいっぱいになりながら、急いで家にもどりました。

そんな五郎兵衛を待っていたのは、父の死でした。

「すまない、父ちゃん。ちきしょう、ちきしょう。」

五郎兵衛は、布団に横たわる父の姿をじっと見つめ、涙を流しながら、何度も何度も畳にこぶしを打ちつけました。

それからというもの、五郎兵衛は何とかして北上川に橋をかけたいという思いで、一生懸命働きました。そのかわら、橋を作るための法律や建築などの勉強もしました。わからないことがあると、専門家に聞きに行くこともありました。

一つ大きな問題がありました。橋を作るためには、たくさんのお金が必要だったので。五郎兵衛は、親せきや知人に協力を求めました。しかし、当時としてはたいへん難しい工事だったので、だれ一人賛成してくれる人はいませんでした。その中には、

「北上川に橋をかけるんだって。頭が変になったんじゃないか。」

などとあざけり笑う人もいました。

そんなとき、五郎兵衛にかすかな光が差し込みました。石巻村本町の区長の田辺吉助が、北上川に橋をかけたいと県令（県知事）に願い出て許可されました。しかし、あまりにも資金がかかりすぎるために、橋作りに手をつけないでいることを知ったのです。すぐに五郎兵衛は、橋をかける権利をゆずってくれるようにお願いするために、田辺吉助の家に行きました。何度も足を運んだ五郎兵衛の思いが、決して田辺吉助の気持ちも動かし、ようやく橋をかけるための権利をゆずり受けることができました。

その後も、困難が続きました。橋をかける権利は何か手にしたものの、県令の許可がなかなかおりませんでした。その理由は、橋をかけようとする五郎兵衛に反対する人たちがいたからです。特に、渡し場の船頭たちは、自分の仕事が減ってしまうため、五郎兵衛の考えには賛成できなかったのです。それでも、五郎兵衛はくじけずに、反対する人を説得したり県令にねばり強く願い出たりしました。五郎兵衛は自分と同じ悲しみを味わった人がいるに違いない。そんな思いをする人が出ないようにするためにも、橋作りを進めなければならぬと考えていました。その思いが伝わったのか、明治十五（一八八二）年二月に、念願の橋作りの許可書を手にすることができました。

待ちに待った橋作りが始まりました。まず、川幅の最も狭い中瀬を利用して、中瀬の東側と西側に橋をかけることにしました。もちろん、五郎兵衛はこれまで以上に働き、資金をつくらせました。それでも、資金は不足しました。私財を投げうって木材を用意しました。また、妻のせいが縄をなって売ったり工事現場で働く人の食事の世話をしたりして、資金の不足を補いました。それでも足りず、五郎兵衛は布団や家財も売りに出しました。冬の寒い最中に、布団の代わりにかやを着て寝るほど、自分たちの生活を切りつめていました。さらに追い討ちをかけたのが大雨による洪水でした。できかかった橋がこわされてしまいました。橋の材料にしていた木材がなんと河口を出て、沖にある田代島や網地島まで流されたこともありました。それでも、五郎兵衛は流された木材を回収し、少しでも材料を確保しようと努力しました。そうした五郎兵衛の姿を見ても、

「橋をかけたのなら、五郎兵衛が人柱になれ。」

「橋作りが成功したら、橋の上を逆立ちして歩いてやるぞ。」



かや：蚊を防ぐためにつり下げる、麻や木綿でできた布で寝床をおおうもの。

人柱：

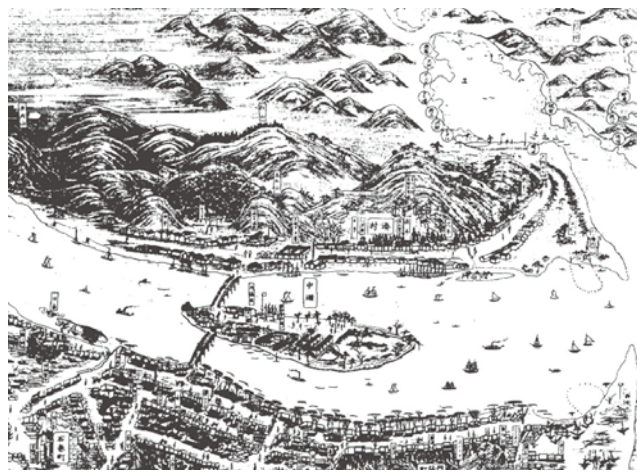
橋や城を造つたりするときに、神の心を和らげ、完成を期するためのいけにえとして生きていく人などを水中に沈めたり、地中のうめたりすること。

と、冷やかしたり馬鹿にしたりする人が絶えませんでした。しかし、五郎兵衛の気持ちはまったく変わりませんでした。それどころか、何とかして橋を作りたいという思いを強めていきました。

日に日に材木が組み合わされ、少しずつ橋の形になって行きました。工事を始めてから五か月後のこと、とうとう五郎兵衛の思いがかないました。五郎兵衛は、父が亡くなったときのことを忘れたことはありませんでした。

橋の完成式には、県令がわざわざ石巻村に足を運び、お祝いの言葉を述べました。県令は、五郎兵衛のりっぱな仕事をいつまでもたたえらるために、お祝いの席で橋の名前を「内海橋」と名づけました。そのほかにもたくさんの方が集まり、橋の完成を喜びました。その中には、工事中で五郎兵衛を冷やかした人たちもいました。しかし、もう五郎兵衛のことを批判する人はいませんでした。

このとき五郎兵衛は、すでに四十一歳になっていました。橋を作りたいと願った日から、十七年もの歳月が流れていました。



内海橋ができたころの石巻の様子 (石巻市図書館蔵)

内海五郎兵衛

内海五郎兵衛は、天保十二(二八四二)年、牡鹿郡水沼村(現在の石巻市)に生まれた。北上川の石巻一湊間に橋をかける計画を立てたが、渡し舟の船頭たちから反対されてしまう。しかし、自分の財産までも投げうち、苦勞の末に橋を完成させた。この橋は、その偉業をたたえられ「内海橋」と名づけられ、現在も多くの人々の生活を支えている。

五郎兵衛は、
渡波の内海家を烏
帽子親とする烏帽
子になり、その
後、内海という姓
を名乗るようにな
りました。

烏帽子親：
元服のとき、烏帽
子をかぶらせ、烏
帽子名をつける人。

烏帽子子：
烏帽子親から烏帽
子名をつけられた
者。

及川 甚三郎 — 夢を追いつける —

及川甚三郎は安政二（一八五五）年、鱒淵村（現在の登米市東和町米川）に農家の三男として生まれました。甚三郎は、子どものころから、何でも自分でやってみないと気のすまないところがありません。

六歳のときには、一度見たら将来大金持ちになるといわれる「金の馬」に会いたい一心で、真夜中に一人で山の中を歩き回ったことがあります。また、十歳のときには、海の水が本当に塩辛いのか確かめるために、二日ばかりで志津川の海まで一人で出かけたこともありました。甚三郎は二十一歳で及川家の婿養子になり、家業の川運送業の仕事を始めました。二年後には北上川を利用し、約四十キロメートルはなれた石巻港まで大量の炭を運ぶ仕事を任せられるようになっていました。



及川甚三郎（東和町源氏ポタル交流館蔵）

ある夏の暑い日に、甚三郎は立ち寄った飯屋で、氷を食べている船員の姿を目にしました。そのころの甚三郎には、夏に氷があるということは信じられないことでした。ところが、東京や大阪では冬に保存していた氷を夏に食べることが流行しており、その日も北海道から東京へ運ぶ途中の氷を、船員が飯屋に持ちこんだということを知りました。甚三郎はじっとその氷を見つめていました。

川運送業…
川や運河などで、
運賃などをもらっ
て人や物を運ぶ
仕事。

飯屋…
ご飯などの飲食物
を出す店。食堂。
飲食店。

ほかの人なら驚きはしても、自分でやってみようと思う人はほとんどいないのですが、甚三郎は思い立ったら、それを納得するまでやってみないと気がすまない性格でした。さっそく鱒の氷を利用して製氷会社を作り、二十六歳のときには仙台でも名を知られるくらい、大きな会社になりました。

三十一歳のころには、長野県で機械製氷工場が作られ、製氷業が発展していることを聞きました。すぐに、鱒でもできるのではないかと考えいろいろ調べてみました。その結果、蚕を育てるために桑を生産できること、近くにきれいな水が流れていること、ボイラーの燃料となる薪が豊富にあることなど、製氷工場をつくるための条件が鱒でも整っていることがわかりました。さっそく長野県へ出かけ機械を買い入れ、技術者を連れて来ることを決めました。一年後には宮城県内で初めての製氷工場を設立しました。さらに、甚三郎は会社を大きくするため、桑の苗を農家に無償で配布し、まゆの生産量を増やす工夫なども行いました。甚三郎は仙台や石巻にも関連会社を設立し、大きな利益をあげるようになりました。

甚三郎は、「新しがり屋の及甚」、「製氷工場の及甚」、「氷屋の及甚」、「川運送の及甚」などと呼ばれ、実業家として成功するとともに、地域の産業を発展させることにも貢献していました。

甚三郎が四十二歳のとき、知り合いの佐藤惣右衛門からこんな話を耳にしました。

「カナダのフレーザー川では、たくさんサケがとれるが、卵はすべて捨ててしまうそうだ。」

その話を聞くと、

「えっ、ほんとうか。」

と、甚三郎は目を大きく見開きました。そして、そのまま一点を見つめ、じっと考えこんでしまいました。甚三郎はチャンスがあれば、カナダでサケ漁をやってみようという気持ちを抱きました。自分の思いを押しさえきれなくなり、家族や周囲の反対を押し切り、氷屋や製氷工場の事業をすべて親せきに任せ、たった一

実業家：
会社などをつくり、
経営する人。

人で海を越え、カナダのフレージャー川に行くことにしました。

船に乗り、二十日間かけてバンクーバーに着きました。しかし、約束していた佐藤惣右衛門には会えませんでした。けれども、船の中で知り合った牧師の助けで、通訳を見つけてもらい、通訳とともにフレージャー川の近くの町にたどり着くことができました。甚三郎はすぐに、缶詰工場に足を運びました。間違はなくサケの卵が捨てられていることを確かめた甚三郎は、目の前に大きなチャンスが広がっていることを確信しました。

甚三郎は、いつものように入念に調べました。どうしたらサケをとる許可が得られるのか、工場を作るためにはどうしたらよいかなど、日本で会社を作るよりも難しいことばかりでした。しかし、持ち前のチャレンジ精神に灯がついたように、甚三郎は熱心に調べました。甚三郎はサケ漁の経験はありませんでしたが、バンクーバー近くの漁師町で、サケ漁などをしながら、約一年間は現地の様子やサケ漁について勉強をしました。そして、数せきの船と少しの土地を借り、丸木小屋を建て日本人移民の仲間五人と、サケ漁を始めることができるようになりました。

甚三郎が四十七歳のころには、日本からの移民も多くなり、フレージャー川の中にあるドン島とライオン島を借りるまでになりました。甚三郎を中心とする日本人移民の仕事ぶりが現地の人々にも認められるようになりました。仕事が軌道に乗り出すと、甚三郎は塩ザケやサケの卵を日本へ輸出し、さらには醤油や味噌、酒づくりまで行うようになりました。ドン島は及川島と呼ばれるようになり、ライオン島はいっしょに事業を始めた仲間の名前から佐藤島と呼ばれるようになっていました。

日本からきた人たちが、汗を流しながらも生き生きと働いている姿を見て、甚三郎は、あのとときの自分の選択をしみじみと考えていました。

カナダに渡ってから十年が過ぎたころ、甚三郎のふるさとの村が、赤痢の流行や二年続きの不作、日露戦争の影響などにより、食べるものもなく働いても働いても生活は苦しいものになっていたことを知りました。甚

入念に…
ていねいに
くわしく。

日露戦争…
一九〇四年に、
日本とロシアが
行った戦争。

三郎は、村人を救いたいという気持ちで、カナダで働こうと熱心に誘いました。甚三郎は水安丸という中古の船を自費で用意し、カナダに行く手伝いをしました。数々の困難がありました。人々は熱心に働き、かせいだお金をふるさとに送金できるようになりました。その後も登米地方から多くの人々がカナダに渡っていくようになり、日本人のカナダ移住の道を開くきっかけとなりました。

現在でも、甚三郎の夢を追い続けた精神はカナダで語りつがれ、水安丸で渡った人々と関係の深い人々がカナダ全土に住んでいます。特に、B・C州バーノン市は、登米市の友好姉妹都市として交流を深めています。



水安丸記念碑 (東和町華足寺)

及川甚三郎

及川甚三郎は、安政二（一八五五）年、鱒沢村（現在の登米市）に生まれた。四十二歳のときにカナダに渡った後、故郷の人々の生活の苦しさを知り、多くの人々をカナダへ移住させたことで、故郷の村を貧しさから救った。甚三郎がカナダ移住の道を開いたおかげで、カナダのバーノン市と登米市は友好姉妹都市として現在も交流を深めている。

B・C州：
ブリティッシュ・
コロンビア州のこ
と。
友好姉妹都市：
文化交流などを
目的とした結びつ
いた都市と都市。

フランク 安田 — イヌイットを救う —

フランク安田（安田恭輔）は明治元（一八六八）年、医者をしていた安田家の三男として生まれました。十歳のとき、母を病気で亡くし、次の年には父も亡くしたことで、町にある船会社で働いて暮らすことになりました。恭輔は、船員たちから話を聞くうちに、アメリカにあこがれをもつようになりました。

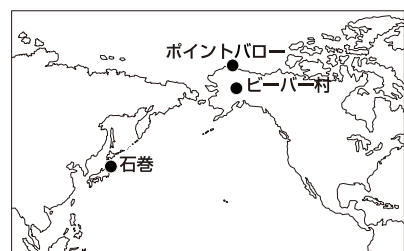
恭輔は、十九歳のとき、見習い船員となって、サンフランシスコに渡りました。恭輔はフランク安田と名前を変え、農場や化粧品会社で働きましたが、三年後には、また船に乗ることになりました。フランクの乗った船は、アラスカの海岸沿いをパトロールしながら密漁船などを取り締まったり、イヌイットの村に食料などの援助物資を運んだりするのが仕事でした。



生肉を食べるフランク安田

あるとき、フランクは船長の命令で気象観測員としてポイントバローで船を降りることになりました。そこは、アラスカの最も北にあり、北極海に面したとても寒い村でした。クジラなどの海の動物をとって暮らしているイヌイットが五百人ほど住んでいて、ほかには商売をしていたアメリカ人が、数人住んでいるだけでした。イヌイットは、ほかの人種とは簡単に仲良くなれないといわれていましたが、フランクは何回か訪問しているうちに仲間に入れてもらうことができました。日本人の顔がイヌイットに、よく似ていたこととフランクが生肉を平気で食べたことが、その理由でした。かれらは、フランクのことをジャパンという種族のイヌイットだと思いました。

ここで暮らすことを決めたフランクは、言葉を覚え、狩猟の腕をみがきました。やがて、腕のいい優秀な若者として、多くのイヌイットから認められるように



密漁船：許可なく動物や魚介類をとる人（密猟者）が利用している船。

イヌイット：北極圏に住む原住民をエスキモー。カナダでは、イヌイットと呼んでいる。

種族：言葉や文化などの共通のものをもつ民族。

なりました。そして、村で一番大きな狩猟グループの親方の娘ネビロと仲良くなり、結婚しました。

このころからポイントバローでは白人の密猟などが原因で、クジラやアザラシなどの海の動物が捕れなくなり、イヌイットは暮らしに困るようになりました。その上、はしかが流行したため、たくさんの人が次々と亡くなりました。困った村人たちはフランクに助けを求めました。たのもしい若者で、英語も話せるフランクに大きな期待を寄せたのです。はしかで亡くなる人が百人を超え、ついに自分の幼い娘までもが、命を落としてしまいました。どうしたらいいか当てのないフランクは困ってしまいました。

そんなある日、フランクはアラスカで金を探するためにポイントバローにやってきたカーターというアメリカ人と出会いました。山分けするからいっしょに金探しをしないかというカーターに強く誘われましたが、決心がつきませんでした。金探しのことは何もわからなかったし、カーターが信用できるかどうかとも不安だったからです。

その一方で、フランクは、次々と亡くなっていく仲間や家族のことを考えると、何とかしなければという思いがどんどん高まっていくのでした。

「イヌイットが生きていくためには、動物が必要だ。海がだめなら山に住もう。

そのためには場所を探すこととお金を手に入れることが必要だ。」

フランクはカーターにかけてみることにし、ネビロに言いました。

「おれは、カーターといっしょに金を探しに行く。君は村で待っていてくれ。」

すると、ネビロが言いました。

「いいえ、わたしも行きます。わたしもいっしょに金を探します。」

間もなく、ネビロを加えた三人は、アラスカの内陸部に入って行きました。当てのない金探しは三年が過ぎ、二人の間には女の子が生まれました。

ある日のこと、フランクはテントのそばに置いてあった草の束にキラキラ光る砂粒



フランク安田(左)とトム・カーター

はしか：
五・六歳の幼児が
かかりやすい発熱
などが伴う伝染病
「ましん」ともいう。

を見つけてさげびました。

「ネビロ、これだ。これは間違いなく砂金だ。この草の束をどこから持ってきたんだ。」

ネビロに案内された小川の底には、ピカピカと光るおびただしいほどの砂金の粒がありました。カーターはこの場所をシャンダラー鉾山と名づけて金を掘り始めました。フランクは約束どおり大金を分けてもらい、ポイントバローにもどりました。そして、フランクは村人にこう言いました。

「ユーコン河のほとりに、いい場所が見つかった。魚はとれるし、ビーバーがたくさんいて毛皮は高く売れる。ヘラジカやトナカイ、キツネ、クマ、オオカミもいる。獲物には不自由しない。また、シャンダラー鉾山の近くなので、運送の仕事もある。しかし、いいことばかりではない。クジラやアザラシがいるわけではないし、インディアンとのトラブルもあるかもしれない。それでも行きたいという人はついて来てほしい。」

村人の意見は半々に分かれました。移住に賛成したのは若い人たちでした。先に移住した人の様子を見てから考える人もいました。

ポイントバローからのイヌイットが約百人、金探しの途中で出会ったイヌイットが約百人、合わせて約二百人を連れての大移住となりました。食料や水、生活用品などを犬ぞりに積み、長い隊列が進みました。フランクはみんなをばげましながら雪と氷におおわれた二千メートル級の山々が連なるブルックス山脈を越え、八百キロメートルもの距離を進んだのでした。この旅でイヌイットの人たちを苦しめたのは、木のおいででした。

ポイントバローには樹木がなく、なおに慣れていなかったために、大人も子どももばたばたと倒れてしまいました。なおに慣れるため三日間も休憩しなければなりません。二百人もイヌイットを目的地に連れて行くという大変な仕事のほかに、フランクにはもう一つの難しい問題がありました。村を作ろうとしている場所が、インディアンの縄張りの近くにあるため、どうしても許可をもらう必要があったのです。



高い山々をこえる
イヌイットたち

砂金：
金のつぶ。風化や
浸食などによって
金がつぶ状になっ
たもの。

インディアン：
もともとその土地
に住んでいた人た
ち。
北アメリカ大陸の
原住民。

フランクは、金探しの途中で知り合った日本人で、インディアンと仲がいいジョージ大島に頼んで、話し合いの場をつくってもらいました。たぐさんのおくり物を持ってインディアン（インディアンの首長）の酋長と向き合いました。フランクは、イヌイットの大酋長の役になって必死に交渉したのです。ここで失敗すると、さらに別の場所を探して当てのない旅を続けなければならなくなるからです。ジョージ大島の働きと、フランクの堂々とした態度によって、とうとう移住を許してもらうことができました。その夜、フランクはネビロと二人、夜空にきらめくオーロラをじっと見上げていました。



ビーバー村のオーロラ

こうして、フランクに連れられて長い長い旅を続けてきた二百人ものイヌイットは、ユーコン河のほとりのフランクが用意した家に入って、新しい生活を始めました。フランクは、カーターから渡された大金をおしげもなく村づくりに使いました。フランクは、この村をビーバー村と名づけました。

昭和三十三年（一九五八）年、ジャパニーズモーセ、アラスカのサンタクロースといわれたフランク安田は日本にもどることなく、九十歳で亡くなりました。イヌイットのために尽くした一生でした。平成元年（一九八九）年にアラスカの州議会は、フランク安田の偉大な業績をたたえる表彰を行いました。

また、今でも、石巻市とアラスカ州のビーバー村の交流が継続されています。

フランク安田

フランク安田（安田恭輔）は、明治元（一八六八）年、石巻（いしのまき）に生まれた。後にアメリカに渡り、全滅寸前の二百人ものイヌイットの移住を成功させ、ビーバー村を作った。フランクは「ジャパニーズモーセ」、「アラスカのサンタクロース」と呼ばれ、平成元年（一九八九）年、アラスカ州議会はその業績を称え表彰を行った。

モーセ：
古代イスラエルの
民族指導者。
モーセともいう。

秀ノ山 雷五郎 — 小さな体で大横綱に —

横綱秀ノ山雷五郎（本名 辰五郎）は、気仙沼市最知川原の百姓久吉の五男として生まれました。幼いころからその怪力ぶりが大評判で、大人たちが五斗俵一俵（約七十五キログラム）をようやくかつぐのに、辰五郎は両手に一俵ずつをやすやすとかかかって運んだといわれるほどでした。

辰五郎はその力自慢を生かし、相撲取りになりたいという夢をもっていました。辰五郎には、地元の草相撲で大関として大活躍をしていた自慢の兄がいたからです。辰五郎はそんな兄に強いあこがれをいっていました。



秀ノ山雷五郎の銅像（気仙沼市波路上岩井崎園地内）

辰五郎十六歳のとき、兄たちは本吉郡の力士たちを引き連れ、岩手県気仙郡盛（現在の岩手県大船渡市）の力士たちと勝負するため、遠征することになりました。辰五郎も相撲が取りたくてしかたがありませんでした。いっしょに行くことを断られました。兄にはないしよで遠征軍についていきました。

盛に着くと、相撲会場にはたくさんの方が集まっていました。辰五郎はその人たちにまぎれながら、兄たちの取組を応援しました。ところが、どうでしょう。本吉の力士たちは、辰五郎の目の前で次から次へと負けていくではありませんか。ついには、辰五郎の自慢の兄さえも負けてしまいました。

一斗：
昔の量を表す単位。
一斗は十升で、約
十八リットル。

草相撲：
しるつとの相撲。

辰五郎は、とっさに土俵に駆け上がり、相手側の大関に飛びかかりましたが、あっさり土俵にたたきつけられてしまいました。何度飛びかかっても、あつという間に投げられてしまいます。辰五郎がとてめかなう相手ではありませんでした。

辰五郎は、世の中にはこんなにも強い力士がたくさんいることを初めて知りました。そして、相撲取りになることを決心し、江戸に出ることにしました。

「親方にお目通りを……。どうかわたしを弟子にしてください。お願い申します。」

辰五郎は、来る日も来る日も、足を棒にし、相撲部屋を訪ね歩き、頭を下げました。しかし、体が小さいうえにわずか十六、七歳の田舎者。紹介してくれる人もない中で入門を許す相撲部屋などあるはずがありません。やっとの思いで住みこみで働くことが許された相撲部屋では、稽古どころか炊事や子守の雑用ばかりで、すぐに放り出されてしまいました。

江戸時代とはいえ、力士は二メートルほどもあるような大男で皆怪力ぞろい。辰五郎の身長は、一六四センチメートル。体が小さく体重も軽く、だれが見ても力士には不向きな体格だったのです。

希望を失った辰五郎は、二年もの間いろいろな土地をさすらった末に、身も心もぼろぼろになって、八木宿（現在の栃木県足利市）の油問屋の前にたどり着きました。

「お願い申します。どうかわたしをここで働かせてください。何日も飯を食っていないのです。」

油問屋の主人高木源之丞は、辰五郎の丈夫そうな体つきと力がありそうな姿を見て油絞めの仕事にはうってつけたかと思いい、雇い入れました。辰五郎にとっては、ふるさとをはなれて初めて人の心の温かさにふれ、自分のことを認めてもらった瞬間でした。辰五郎は、どんな苦しい力仕事でも黙々と働きました。そんな辰五郎の姿は、いつしか源之丞の目に留まるようになりました。

『油絞め』(油締め) ……
蒸した菜種や胡麻を樽製の絞り器に入れ、上から圧力をかけて油を絞る作業のこと。

ある日、辰五郎は源之丞に呼ばれて部屋に行きました。

「辰五郎や。おまえは、本当に一生懸命よく働いている。ありがとう。ところで、おまえは将来、どんなことをしたいのだ。このまま油絞めをしていてよいのか。」

辰五郎は、胸に秘めていた相撲取りへの思いを涙ながらに源之丞に話しました。一生懸命な働きぶり、初めて知った相撲取りへの思いに心打たれた源之丞は、相撲部屋に入門できるように働きかけてやることを約束しました。源之丞は、江戸に仕事があるたびに、また、ときには辰五郎のためにわざわざ江戸に出向き、わずかなつてを頼りに、当時の横綱、秀ノ山伝治郎のもとに入門できるように働きかけました。辰五郎は、源之丞の姿が見えなくなるまで見送り、どんなに夜遅くなっても、どんなに天候が悪くても、帰りを待ちました。そして、今までにも増して、仕事に精を出しました。

ついに、辰五郎は源之丞の力添えで相撲部屋での力士としての生活ができるようになったのです。

体が小さく体重の軽い辰五郎だけに、それを克服するためには、もともと持っていた力をさらに強くし、技にみがきをかけることしかありません。相撲界に入った辰五郎にとっては、どんな稽古の厳しさも苦しくはありませんでした。自分が相撲界に入れたのは源之丞のおかげであり、源之丞への感謝を一日たりとも忘れることはありませんでした。

歩みは遅かったものの、持ち前の努力と粘り強さで辰五郎は、じりじりと番付を上げていき、関脇時代には、四場所全くの負け知らずの三十連勝の大記録を達成するまでになりました。また、大関時代には、六場所でもわずか三敗しかしないという好成績を残すほどの勝負強さを発揮しました。

ついに、辰五郎は、師匠の名前をいただき四股名を「秀ノ山」と改め、入幕後八十八勝十四敗の好成績が認められ、「秀ノ山雷五郎」として第九代横綱に上りつめました。秀ノ山、三十八歳のときでした。三十八歳といえ、今の相撲界では、すでに現役を引退して相当の年月がたつほどの年齢です。相撲界の最高峰である横綱となるまで、

「つて」…
頼りになる人。知り合いの手がかり。

関脇…

相撲の番付で横綱、大関の次の地位。

四股名…

相撲の力士の名前。

『横綱昇進の年齢』

(三十八歳)

昭和時代の大横綱大鵬・北の湖等の現役引退の平均年齢は三十一・五歳、初土俵から引退までの年数は平均十七年である。

相撲取りになろうとしてからすでに二十二年もの年月がたっていました。
土俵に上がる横綱秀ノ山雷五郎には、いつも大声援がおくられました。

二百四十年間ほどの江戸時代の相撲界で横綱になれたのは、わずか十二人であり、江戸時代後半の名だたる横綱の中で、秀ノ山は、八割四分二厘と最もよい勝率を誇る大横綱となりました。

平成二十三年三月十一日の東日本大震災の大津波で、秀ノ山の生家付近も大きな被害を受けました。けれども、今も生家の近くの岩井崎には、彼の銅像が遠く太平洋に、そして未来に向けて右手を大きく伸ばしてすつくと建っています。



横綱 秀ノ山雷五郎
(財団法人 日本相撲協会蔵)

秀ノ山雷五郎

現在の気仙沼市最知川原に生まれた辰五郎（秀ノ山雷五郎）は、子どものころから怪力で有名だった。江戸の相撲部屋に苦勞の末に入門した辰五郎は、血のにじむような練習を続け、十九年をかけて、とうとう横綱まで上りつめることができた。生家の近くの岩井崎の公園には、辰五郎の功績が称えられ銅像が建てられている。

『二百四十年』…
伝説の初代横綱明石志賀之助の初土俵1624年から江戸時代最後の横綱陣幕久五郎が横綱に昇進した1867年の間。

落合 直文 — 短歌を多くの人に広める —

父君よ 今朝はいかにと 手をつきて 問ふ子を見れば 死なれざりけり

「お父さん、今朝の体調はどうですか、と礼儀正しくたずねるわが子を見ると、この子のためにも病気で死ぬわけにはいかない」という意味の短歌です。自分が重い病気でありながら、わが子のことを思いやる作者のやさしい気持ちが伝わってきます。百年以上も前に詠まれた短歌ですが、作者の思いは今の時代の読者にも、手に取るようにわかります。この短歌の作者が落合直文です。

落合直文は、明治時代に活躍した歌人・国文学者です。明治時代は何もかもが変わり、いろいろなことが進歩した時代でした。文学においても、西洋からきた新しいものもはやされていきました。一方、日本独自の詩である短歌は長い伝統にしばらくは、決まりきった表現が多いため、しだいに多くの人から好まれなくなっていました。

直文は、文久元（一八六二）年に、松崎村片浜（現在の気仙沼市）で、鮎貝家の次男として生まれました。幼名を亀次郎といい、十四歳のころ、国学者の落合直亮の養子になりました。幼いころから本が好きで、短歌や文章を書くことがたいへん得意でした。そのような直文は、家族から仙台で学校の教師か神官になることをすすめられましたが、きっぱりと断りました。歌人や国文学者として仕事をしていきたいと考えていたからです。短歌や国文学を新しい時代に合ったものに発展させることが、自分がすべき仕事なのではないかとも考えていたのでした。自分の名前を直文としたのは二十六歳のころです。「文」の字に、文学で生きていくという気持ちを表したと考えられています。

国文学者…
日本の文学を研究
する学者。

神官…
神社で神につかえ
る仕事をする人。
神主。

直文は、いつも短歌がもっと多くの人に親しめるものになってほしいと願っていました。そのころ、短歌の世界では、昔からのかたちを守ろうとする旧派と、西洋から入ってきた言葉を使うとする新派が対立していました。旧派は、昔からのかたちを何も変えずに守ろうとしていましたが、そればかりでは読む人々があきてしまいます。一方、新派は目新しい表現や言葉を使うとしていましたが、まだまだよい短歌を作ることができていませんでした。どちらにもよいところを見直すべきところがありました。しかし、どちらも相手のよいところを認めずに言い争いを続けていたのです。このようなことでは、短歌がよりよくなることも、多くの人が親しめるものになることもありません。直文は、すべての歌人や学者、短歌愛好家が力を合わせる必要だと考えていました。そのことを繰り返していったのでした。

それだけではなく、直文は、新しい時代にふさわしい短歌を自分たちで作り上げていこうと考えました。そのために作ったのが、浅香社という短歌のグループでした。このグループには、直文の考えに賛成する若い歌人が集まりました。そこで、短歌を作ったり、作った短歌をよりよく直そうと話し合ったりしました。浅香社は、短歌の革新運動の中心となりました。

直文は、弟子たちにいつもこう話していました。

「自分自身の短歌を作りなさい。昔の人や今の人のまねをしてはいけません。もちろん、わたしの歌をまねするのはいけません。一人一人が自分のよいところを伸ばすようにしなさい。」

そのころ、直文と同じように短歌の革新運動をしていた正岡子規という歌人がいました。子規は、新聞に随筆を連載していました。歌人らしく短歌を取り上げることが多いので、直文も子規の随筆を読むことをとても楽しみにしていました。その連載の中で子規は、短歌がすぐれているかどうかは、作者の評判や流派には関係がないと述べていました。そして、短歌のよしあしを決めるには、みんなで意見を出し合って、話し合うことが大切だとも述べていたのでした。

革新：
新しく変わること。

随筆：
見たり聞いたりしたこと、経験したことなどを自由に記述した文章。
エッセーともいう。

連載：
続けて、新聞などに記述がのること。

ある日のこと、直文は、子規の病気がひどくなって、りんごをすってしぼったジュースのようなものなどいとのどを通らなくなったことを知りました。直文は、子規のことを心配して、何かしてあげられないかと考えていました。ちょうどよいことに、直文のふるさとからりんごが送られてきました。つやつやとした大変りっぱなりんごです。直文は、すぐにこのりんごを果物の好きな子規に送ってあげようと思いました。近くにいた弟子たちも、おみまいにりんごを送ることは、いい考えだと思いました。

ところが、その日の新聞を読み始めた直文は、じっと目を閉じ、考えこんでしまいました。直文は、子規の随筆を読んだのでした。そんな直文の様子に気がなった弟子たちも新聞を読みました。

子規の書いた内容は驚くべきものでした。そこで直文は、自分の短歌が「変な歌」、「わかりにくい歌」であると書かれていたのを目にしたのです。その上、言葉を変えれば少しはよくなると、厳しく批評されていたのでした。弟子たちは、これでは直文がりんごを送ることをためらうのもしかたがないと思いました。弟子たちが子規の記事を読んだことを伝えると、直文はうなずきながら、

「せっかく、子規がわたしの短歌をよくしようとして批評しているのだから。」

とおだやかに話したのでした。弟子たちは、はっとしました。直文は少し困ったような顔をしていましたが、決しておこったのではなかったのです。直文はこのようなきでも、自分が願っていること、いつも考えていることを弟子たちに伝えたのでした。



そして、今、りんごを送ったのでは、子規が遠慮して連載をやめてしまうのではないかと考えたのでした。

直文はりんごに目を向けながら、子規の病気が早くよくなると思います。そして連載が終わったら、このりんごを子規に届けるつもりであることを話しました。

ところが、次の日も、その次の日の新聞にも、直文の短歌を批評する子規の連載が続いていました。とうとう、りんごはかごに入ったままいました。結局、直文は子規にりんごを送ることができませんでした。

直文は、すっかり悪くなってしまったりんごを、やはりおだやかな目で見つめ続けました。



落合直文（気仙沼市煙雲館（直文の生家）所蔵）

落合直文

落合直文は、文久元（一八六一）年、松崎村片浜（現在の気仙沼市）に生まれた。明治二十一（一八八八）年、「孝女白菊の歌」という新体詩を発表し、全国的に有名になった。明治二十二（一八八九）年、森鷗外とともに新声社を作り、近代詩に大きな影響をあたえた訳詩集『於母影』を刊行した。明治二十六（一八九三）年、浅香社を作り、近代短歌を開くもとなる和歌革新運動を行った。



の知恵と工夫にはぐくまれ（北上川）



大地をうるおす北上川の流れ 先人